

笹川保健財団 地域啓発活動助成

2021 年 2 月 12 日

公益財団法人 笹川保健財団
会長 喜 多 悦 子 殿

2020 年度地域啓発活動助成
活 動 報 告 書

標記について、下記の通り活動報告書を添付し提出いたします。

記

活動課題

「人生会議を始めましょう！ in とわだ一転ばぬ先の杖、もしもの時に自分が大切にしたいことを考えよう」

活動団体名：

一般社団法人 緑の杜 みどりの風訪問看護ステーション

活動者（助成申請者）名：

太田 緑

活動報告書

2021 年 2 月 12 日

1. 活動テーマ

「人生会議を始めましょう！in とわだ 一転ばぬ先の杖、もしもの時に自分が大切にしたいことを考えようー」

2. 活動地域

青森県十和田市

3. 活動の目的・活動の意義

住み慣れた地域で最期まで暮らすために、市民が自分自身の大事にしたいことを考えるための機会と場の提供を行う（地域住民への啓発活動）

- ① 自分自身が大切にしたいことを考え、もしもの時のための意思決定支援へのきっかけを作ることができる。
- ② もしものを考えることで、他人事から自分事にすることで、老いても病んでも住み慣れた処で暮らすために必要なことを地域住民と共に考える機会になる。
- ③ 今まで開設してきたくらしの保健室（ナーシングカフェ）を地域の中で開催し、必要とされるところに相談の場・学び場・語り場を移動し、活動を継続する。

4. 活動の内容・実施経過

活動内容の前に、コロナ禍での地域の実情と経過、その中での実施経過として報告す

る。

- ・年が明けてダイヤモンドプリンセス号のコロナウイルスのニュースを見ながら、初めは対岸の火事であった。心のどこかで感染拡大が始まれば大変なことになると思ったものの、海外に行ってきた人がそばにいれば大丈夫と思う気持ちもあった。

しかし、あっという間に十和田市で介護施設クラスター、病院内での医療職の感染。市外から通勤しているスタッフの家族からの不安の声や保育園から訪問看護師の子供は登園を見合わせてほしいなど、対岸の火事ではなく、一気に渦中の人になった。感染の心配ではなく、誹謗中傷というパンデミック下での人の心理の怖さを知った。渦中は大げさかもしれないが、隣の家の距離にある病院と地域に大きな大きな事件だった。そのため、活動を考える間もない日々が続いた。やっと落ち着いたかと思っただけ矢先に、青森県内各市でのクラスター発生。

- ・活動の手段として考えていた移動ナーシングカフェは全く開催のめどが立たず、模索はしても人が集まること自体ができない状況では、今までとは全く違う形で活動しなければならないということが明らかになった。そこで、コロナ禍で可能なリモート交流会を開催し、コロナ禍を利用して、もしもの時の意思決定支援、老いても病んでも住み慣れた処で暮らすために必要なことを考えることにした。

- ・交流会は2回連続開催を予定した。

- ・道具としてもしバナゲームを使用する計画だったが、今回の参加者は会社のトップ

だったり、起業家あったりと、医療介護職ではないが、普段から意思決定をすることの多い立場や仕事の人が多い参加となった。そのため、道具を使用しなくても自分たちが考えていることをしっかりと話すことができた。

・一般住民は、リモート交流会の招待をしてもリモート会議ができる状況の人は少ないことがわかった。(機器や通信の問題)

(内容)

・もしもの時は、仕事柄後継者のことや従業員、会社の継続が気になる。遺書や遺言を作成している。苦痛がないことや自身の尊厳が守られることが重要。介護してくれる人がいないから施設、いなくても自宅で過ごせるのであれば、自宅がいい。ヘルパーやケアマネジャー、看護師、医師が不足している中で、今後どうなるのか。現状では地域の高齢者施設に空きがない、入りたいと希望する場所は少ない。

・コロナウイルスのワクチンは、受けたくはないけど、仕事柄義務で受けると思うが、元々持病やアレルギー体質で怖い。

・自身のことより、地域の将来や後継者のことが気になる。若者が働き続けられる雇用の場も確保し、事業の安定も測る必要がある。こんな時だからこそ、地域に根を張り、頑張らないといけない。新事業も検討している。

1回目参加者：4名（うち1名ホスト）

2回目参加者：10名（うち1名ホスト）



5. 活動の成果

私自身が想像していた内容とは、違う話に盛り上がった交流会になった部分もあったが、今回の内容から成果をまとめた。

- ① 意思決定支援へのきっかけ作りと考えていたが、もしもの時について考えている人が今回は多かった。自分自身の大切にしたいことや希望だけではなく、地域全体や会社のことを案じる発言も多く聞かれた。
- ② コロナ禍は否応なしに他人事から自分事になるとわかった。
- ③ 今回の参加者は、それぞれが自分にできることはなにかと模索していた。

- ④ コロナ禍で飲みニュケーションもできず、集まっての飲食もできないため、「今回の交流会を楽しみにしていた。」「リモートだと遠方の人も参加でき、会いたかった人にこの場で会えた。」「参加できてよかった。」「貴重な意見や情報を聞いた。」「今後もこのような場を継続して開催してほしい。」という意見が大半だった。
- 語り場の提供にはなったと考える。

6. 今後の課題

- ①途中参加や途中退室もあり、自己紹介を何度か繰り返すことになったり、話が中断することもしばしばあった。リモートの難しさでもあるが、進行役の仕切りが慣れていないこともあり、場のコントロールが難しかった。初めに本日の内容や進行表を共有しておく必要がある。

- ②今回は自由度が多く、自由な意見が言える環境とメンバーであった。全く知らない人同士では、なかなか本音は言えないと思われ、リモートで交流会を実施する際のルール作りが必要と感じた。

7. 活動の成果等の公表予定

日本死の臨床研究会東北支部に発表予定。